近代における二條城本丸庭園の地割・植栽の経年変化について

内 田 仁*

Chronological Changes of Layout and Plants Grown at Honmaru Garden
of Nijo Castle in Modern Ages

Shinobu UCHIDA

摘要：本研究は明治末期・大正中期・昭和期の平面図及び『明治廿八年度 臨号明細書』の添附絵図面や明治29年頃・昭和15年の写真等を基に近代における二條城本丸庭園の地割・植栽の経年変化について考察した。明治29年当初から基本的な地割及び庭園景に変化はなかった。但し、現在では築山に登る園路は保存状態に変化が生じてきた。現在の植栽形態は竣工当時と比べ、樹木が覆い茂り変貌してしまったようにも見えるが、昭和15年とはほぼ近いものであった。明治29年頃や昭和15年の多聞堀跡は現在のように常緑樹には覆われていない。

1. 二條城本丸庭園の沿革と本研究の目的

二條城は慶長8年(1603)徳川家康が京都御所の守護と將軍上洛の時の宿泊所として堀川二条に造営し、3代將軍家光の時代に完成した城である。二條城本丸は將軍家光によって寛永元年(1624)から寛永3年(1626)にかけ増築され、本丸御殿、天守閣や隅櫓、多聞堀などが造営された。しかしその後、寛延3年(1750)天守閣は落雷により、本丸御殿と同隅櫓などは天明8年(1788)市中の大火の飛び火により焼失した。幕末・明治初期には徳川慶喜の「居室」が本丸に建てられ、茶庭も存在していたが、明治14年(1881)京都府所管時に老朽化が激しいため撤去された¹⁾。明治初頭、京都府は勲業殖産の趣旨に基き要樹要材並びに果樹の栽培を奨励し、自らも二條城本丸跡、同城周囲などに植樹を試みている²⁾。

現在の本丸御殿は旧桂宮御殿の一部で、明治天皇の命により宮内省が明治26年(1893)から翌年(1894)にかけ、二條城本丸内へ移築した。その際、枯山水風な庭園(空泉水庭園)³⁾も作庭された。明治28年(1895)明治天皇が二條城へ行幸の折、庭園景に関する御指示があり、それまでの空泉水庭園は芝生を主体とした築山風庭園に改作され明治29年(1896)3月10日に完成した⁴⁾。昭和14年(1939)二條離宮は宮内省より京都市に下賜され今日に至っている。現在の本丸庭園は作庭されてからほぼ1世紀もの歳月が経過しているが、依然不明な点が多く文献¹⁾や研究⁴⁾も数少ない。そこで今回は特に明治28年作庭された本丸庭園に焦点を当て、明治末期、大正中期、昭和期の二條城の平面図、明治29年(1896)頃、昭和15年(1940)の写真などを基に検討し本丸庭園における地割の経年変化と植栽形態の変遷について考察する。

2. 作庭当時の時代背景

現在の本丸御殿は、桂宮家が途絶えた後、明治天皇の御意向によって弘化4年(1847)京都御所内に建てられた桂宮邸の一部を明治26年から翌年にかけ二條城本丸内に移築されたもので、移築とともに空泉水庭園が作庭された。この庭園について明治27年6月10日付『京都日出新聞』によると「…宮内省にては、右建物の庭に古き意匠の山水を造らしめらるる趣きにて其築造方を大宮通錦下る植木商井上清兵衛に命ぜられたるより、同人は榮譽あることとし庭園に就いて種々調査を為したる来其規模を天竺四季の山水に取りたと言伝える鳥羽天皇城南離宮の庭園の今は僅に秋の山水のみ其の形を存するを幸い意匠を之に取り更に工夫を加へて四季の山水即ち東を春、南を夏、西を秋、北を冬とし四季の景色を造り出すこととし近々着手する都合なりと云う。…」と記載されている。この記事から庭園の意匠は京都市伏見の城南宮庭園を参考に、植木商井上清兵衛によって作庭されたことが判る。しかし、明治28年5月23日明治天皇が本丸御殿に行幸された折、それまでの庭園をわずか半年余りで改作するように命じた。明治28年10月10日付『同新聞』には「二條離宮御庭御造営、昨年より本年にかけ二條離宮内旧本丸跡へ桂宮御殿御書院等を引移され御庭園も新たに出来せしにより去る五月大本營所在中阿陛下は初めて此新御殿に行幸啓めらせられしか其後御庭園取括又は御改更等仰出されし趣にて過日來工事に着手なし近日主殿寮出張所より御營繕掛官の出張あるべしと云う。」また『明治天紀』⁵⁾によると「…是の日其の三階に昇御、眺望絶佳なるを欣喜に思召さるゝ旨を反復仰せらる、御苑の改造、草木の栽植等悉く聖旨に出づ…」と記載され、

*京都市文化観光局元離宮二条城事務所

旧桂宮御殿移築後初めて行幸された天皇が本丸御殿の3階の部屋で庭園の改造や草木の配植などについて御指図されたことが窺える。井上清兵衛の作庭した空泉水庭園は明治天皇の意にそぐわず、明治天皇好みの庭園に改作された。明治29年5月30日付『同新聞』によると「二條離宮旧本丸跡へ桂宮御殿を移させられ御庭園は畏き辺りの御指図にて改造なりたることは既に記し奉りしが更に皇太后陛下の御思召にて全庭に琉球躑躅を多く植え付けられし由にて昨今は其花満開し頗る美麗なりと云う」と記載され、改作にあたっては、皇太后のお考えも反映されていたことがわかった。本丸庭園改作工事⁶⁾は明治28年7月21日起工、同29年3月10日竣工で、約7か月半の歳月が費やされているが、改作後、明治天皇が二條城へ行幸した記録はない⁶⁾。

3. 平面図からみた形態（地割）の変遷

本丸庭園が描かれている図面は『明治廿八年度 臨号明細書』⁶⁾の添付絵図面（以下「添付絵図面」と略す。）（図1）（縦49.5cm、横74cm）と明治43年12月～大正2年（1910.12～1913）（図2）（縮尺1/1,000）、大正8年10月（1919.10）（図3）（縮尺1/1,200）、昭和2年（1927）、昭和9年（1934）、昭和15年（1940）、昭和16年頃（1941）、昭和30年（1955）、昭和48年（1973）（図4）（縮尺1/1,200）に製図された8枚の平面図が存在している。それぞれの図面を比較検討した結果、「添付絵図面」（図1）と各図面は、ほぼ同様な地割を示していた。すなわち当時より現況のような築山、建物、柔らかな曲線的園路といった基本的地割の変化はなかったと考察される。明治43年12月～大正2年の図面（図2）～昭和48年の図面（図4）までの8枚からは、築山へ登る園路が確認でき、築山の正面から登るもの（約1.2～1.5m巾）2つ、後方から登り中腹で築山の正面園路と合流するもの（約1m巾）1つ、計3つが存在していた。大正8年（図3）では2方向、昭和16年の図面では1方向に階段が描かれ、両図面とも後方から登る園路に階段が設けられていた。これら8枚の図面に描かれた本丸庭園内の園路巾は、園路ごとによって多少異なるが、ほぼ同様な巾（約1.6m巾）で維持されてきた。但し、以下の諸点において、図面から若干の変化が指摘される。すなわち「添付絵図面」（図1）では築山の正面から登る園路2つと各々に階段は描かれていたが、後方から登る園路は絵図面に描かれた松樹や燈籠によって存在しているか否か不明である。また明治43年12月～大正2年の図面（図2）では築山園路入口の位置や西南隅の芝地が広く描かれている点、築山のすそ南側園路が岩岐まで至っていない点などである。

次に大正8年（図3）、昭和2年、9年、16年、30年の図面では天守閣跡地四方周囲に生垣状の植栽が窺える。『明治二十九年度 京号明細書』⁷⁾によれば、「二條離宮

図-1 『明治廿八年度 臨号明細書』の添付絵図面

図-2 明治43年12月～大正2年の本丸庭園平面図

図-3 大正8年の本丸庭園平面図

図-4 昭和48年の本丸庭園平面図

本丸天守跡周囲、込垣取設仕上々申書」と書かれ「高参尺以上、枝張老尺二三寸以上」の紅櫻⁹⁾の苗が「京都市上京区岡崎町 鶴田藤兵衛」から六百五拾本、「大阪府南河内郡岡村字黒土 西川平五郎」より百本購入されている。

4. 写真からみた庭園景の経年変化

上記のように「添付絵図面」(図1)や各図面ではほぼ同様な地割をしていたが、作庭当初の本丸庭園は「添付絵図面」のような庭園景をしていたのか、つまり築山があり、築山を登る園路に階段が設けられていたのか、多聞堀跡には松樹と叢性状の灌木が植栽されていたのかなどの疑問点は『明治廿八年度 臨号明細書』や「添付絵図面」、各図面、現況から推測されるのみで、今までそれらを裏付ける資料がなく不明であった。しかし、今回新たに明治の写真の中根俊彦先生の御協力により入手できた。得られた写真の枠下には「京都八坂社内 成井頼佐」と印字されている。『明治廿八年度 臨号明細書』の二條離宮御庭園写真撮影御入費明細書によると「画面寸法 縦七寸横九寸、四ツ裁寫真四枚撮、七組 但し廿八枚、四円九十銭 但し壱組、参十四圓参十銭 御之通明細相違無御座候也 京都市下京区八坂神社境内 明治廿九年 二月一日 成井頼佐 角印 主殿寮出張所 會計課御中」と記述されており写真の枠下に印字されていた名前と一致している。また写真も同寸法、同組数(七組)であった。更に写真1をみると南側に建物が窺える。『明治十四年、二條城借受定約弁本丸返戻一件』⁹⁾からこの建物は、二條城敷地内の石蔵(旧焰硝蔵)である可能性が高い。石蔵は二條城年表¹⁾によると明治30年(1897)に撤去されている。その後建物も復旧されていないことなどから写真は、明治29年頃に撮影された竣工写真であることはほぼ間違いない。

(1) 竣工写真と図面による比較

これら竣工写真7枚と「添付絵図面」(図1)との比較では築山の正面に2方向から登る園路、それらに階段が設けられていたこと、芝生を配した柔らかな曲線的園路や燈籠の数および位置とも一致していたこと、更に多聞堀跡には常緑樹は見られず、松樹と叢性状の灌木などが確認でき、植栽も含めほぼ一致していたことが判り、「添付絵図面」は、竣工絵図面であると裏付けることができた。但し、撮影角度から後方より登る築山の園路、天守閣跡の腰掛け用の楕丸太6個¹⁾は確認できなかった。次に各図面との比較でもほぼ竣工写真と一致する地割であった。築山には各図面のように築山を登る園路が正面に2方向あり、大正8年(図3)のように階段も窺えた。また曲線的に区切られた園路も一致していた。但し、撮影角度から後方より登る築山の園路は確認できなかった。

(2) 写真による比較

次に得られた写真を基に本丸庭園の経年変化について以下考察する。写真は竣工当時7枚と昭和15年(1940)に撮影された3枚が存在している。これらの写真のうち特徴的なものを取り上げ、竣工当時の写真4枚(写真1, 4, 6, 8), 昭和15年の写真2枚(写真2, 10)を用い、平成4年現在(1992)(写真3, 5, 7, 9, 11)の状況を同一アングルで撮影し比較した。その結果、当時より現況のような築山、建物、柔らかな曲線的園路、雪見燈籠、春日燈籠、層塔を配した基本的な庭園景には変化がないことがわかった。但し、以下の諸点において、若干の変化が見受けられる。築山の正面から登る園路は、竣工当

写真-1 三階より築山を望む(明治29年頃)

写真-2 三階より築山を望む(昭和15年)

写真-3 三階より築山を望む(平成4年)

写真-4 園路より築山を望む(明治29年頃)

写真-8 御常御殿より春日燈籠一帯望む(明治29年頃)

写真-5 園路より築山を望む(平成4年)

写真-9 御常御殿より春日燈籠一帯望む(平成4年)

写真-6 御常御殿より雪見燈籠一帯望む(明治29年頃)

写真-10 園路より雪見・春日燈籠一帯望む(明治15年)

写真-7 御常御殿より雪見燈籠一帯望む(平成4年)

写真-11 園路より雪見・春日燈籠一帯望む(平成4年)

時2つ確認され、各々に階段が設けられている。昭和15年の写真からもそれらは確認でき、南西側から登る方には階段が設けられ、もう一方は樹木の隙間からかうじて園路の入口が窺えた。しかし現況では築山の正面から登る2つの園路や後方から登る園路は上部からの流土や苔などにより覆われ、階段も消失してしまっている。

多間堀跡は竣工当時、松樹と叢性状の灌木がみられたが、昭和15年では灌木の存在は確認できない。両写真とも現在のようにスダジイ、ウバメガシ、クスノキなどの常緑樹では覆われていない開放的な整備状況であった。

また現在の植栽は、竣工当時と比較すると、特に築山周囲の樹木は覆い茂り、庭園景も様変わりしてしまったように窺えるが、昭和15年の植栽形態に近いものであった。

次に竣工当時と現況の比較では、竣工当時(写真1, 4)は雪見燈籠脇の景石後方に松樹が植栽されているが、現況(写真3, 5)では景石前方に植えられていた。また築山麓に竣工当時(写真1, 4)植栽された松樹が、現在(写真3, 5)では存在せず、灌木内にその枯株が残存しているのみである。また竣工当時(写真8)に存在しない景石が、現況(写真9)では存在していた。この景石は「添付絵図面」(図1)にも描かれていないことから明治29年以降据えられたと思われる。更に聞き取り調査¹⁰⁾から築山中腹に昭和後期まで赤松が植栽されていたが、昭和46年頃(1971)枯損し、変りに枝ぶりの似た黒松が植えられたことがわかった。

以上のように平面図、竣工写真、各資料などから当初の設計意図を推測すると、その一つは御殿や庭園園路からみた築山の形態やその周囲の樹木や庭園景を望み楽しむことであり、もう一つは実際に庭園内を散策したり、築山へ登り頂上からみた眺望(日没後は月見台¹¹⁾として)を楽しむことであると考えられる。

5. まとめ

作庭されてから98年目を迎える二條城本丸庭園は明治43年12月～大正2年の図面から昭和48年までの8枚の図面や明治29年頃、昭和15年の写真を現状と比較した結果、地割は現在まで同様に維持されてきたが植栽に変遷がみられ以下のようなことが考察された。

1) 『明治廿八年度 臨号明細書』の「添付絵図面」や8枚の図面からは築山、建物、柔らかな曲線の園路、築山に登る園路が正面に2つ、後方から登り、中腹で築山の正面園路と合流する1つ計3つの園路といった基本的な地割の変化はなかった。但し、「添付絵図面」では築山に登る園路は正面2つのみであった。

2) 今回得られた明治の写真は撮影者の名前、写真の寸法、組数、写真内の建物などから推測して明治29年に撮影された竣工写真であることはほぼ間違いない。

3) 竣工写真からは竣工当時より現況のような築山、建

物、柔らかな曲線の園路、燈籠などを配した基本的な庭園景に変化はなかったことがわかった。但し、竣工写真には、各図面と同様に築山の正面から登る園路が2つ確認され、各々に階段が設けられていたが、現在では築山に登る3つの園路は上部からの流土や苔などにより覆われ、階段も消失してしまっている。

4) 植栽形態においては、竣工当時と比べれば現在の築山周囲は樹木が覆い茂り、変貌してしまったようにもみえるが、昭和15年頃とはほぼ近いものであった。竣工当時や昭和15年頃が多間堀跡は、現在のように常緑樹には覆われていない開放的な整備状況であった。

謝辞：本稿を進めるにあたり、元宮内庁林園課長中根俊彦先生、東京農業大学造園学科の鈴木 誠先生、京都市文化観光局元離宮二條城事務所の諸先輩方の御指導、御協力を賜ることができた。記して感謝の意を表します。

文 献・補 注

- 1) 元離宮二條城事務所(1990): 重要文化財二条城修理工事報告書 第八集
- 2) 田中緑紅(1942): 明治文化と明石博高翁: 明石博高翁顕彰會, p141
- 3) 筆者は『二條城本丸庭園における作庭の変遷』でこの庭園のことを「売泉水庭園」と報告し、旧桂宮御殿の遺構の保存という点から、庭園の意匠もそれに類似させたのではないかと指摘した。しかし、『明治二十七年度 桂宮二條本丸改築費明細・甲』の仕様書による施工方法や『重要文化財二条城修理工事報告書 第八集』によると本丸の敷地は堀の水面から約5m程高く盛土して造成されていると共に「売泉水庭園」の「売」の字が、明治時代独特の崩し漢字「空」の字であることがわかった。更に庭園の意匠については『京都日出新聞』によると京都市伏見の城南宮庭園を参考に植木商井上清兵衛が作庭したことが明らかとなりここに訂正する。
- 4) 内田 仁(1991): 二條城本丸庭園における作庭の変遷: 造園雑誌54(5), p19~24
- 5) 吉川弘文館(1973): 明治天皇記 第八巻: 820~821
- 6) 宮内庁(1895): 明治廿八年度 臨号明細書: 宮内庁京都事務所蔵
- 7) 京都府庁(1896) 明治二十九年度 京号明細書: 宮内庁京都事務所蔵
- 8) 紅櫻は昭和50年代前半まで存在していたが、昭和55年頃にテッポウムシの被害によって枯損、撤去され現在に至っていることが聞き取り調査からわかった。
- 9) 京都府庁(1881): 明治十四年、二條城借受本丸返戻一件: 京都府庁文書, 明, 11, 27, 京都府立総合資料館蔵
- 10) 奥野慶一(談) 1991. 8. 15, 昭和40年代の二條城本

丸庭園について

- 11) 『明治廿八年度 臨号明細書』によると築山のことを「月見台」と称している箇所がある。
- 12) 森 蘊 (1964) : 日本の庭園, 88
- 13) 鈴木 誠 (1987) : 庭園の経年的変化に関する研究 : 造園雑誌50(3), p36~41
- 14) 澤島英太郎, 吉永義信 (1942) : 二條城 : 相模書房
- 15) 川上 貢 (1974) : 元離宮二條城 : 小学館

Summary : Nijo Castle has a garden called "Honmaru Garden", which was constructed in the 29th year of the Meiji Era (1896). However, there is little literature on the chronological changes this garden has undergone and almost no studies have been made of the changes. In this study I aim at clarifying the chronological changes Honmaru Garden has undergone up to now, by using old plans and photographs of the garden. As a result, the garden has undergone small changes in plants grown there, but the garden has been tended and administered with its layout unchanged. As that explanation, all of the old plans of the garden that are available show that the artificial hill in the garden had two paths starting at the front foot of the hill and leading up to its top and one path starting at the hind foot of the hill and joining one of the foregoing two paths halfway up the hill. Some of the old plans show that one or two of the three paths were in the form of flights of steps. Photographs of the garden which were taken at the time of its completion and in the 15th year of the Showa Era (1940) show that the artificial hill had two paths starting at its front foot and leading up to its top and that the two paths were in the form of flights of steps. The area where a wall called Tamon-bei originally existed is now replaced with evergreen trees and does not give an open impression, but those photographs show that the site of the wall was not planted with trees at the time when the photographs were taken. Today, the three paths leading to the top of the artificial hill are covered with moss and grass, and the garden stones and the garden lanterns are hardly visible because of shrubs.

After the competent authorities was passed from the Imperial Household Agent to Kyoto City in 1939, it opened to the public. And the character of Honmaru Garden was changed from individual use to public one. With the result that it has become difficult to tend and administer the garden as before.